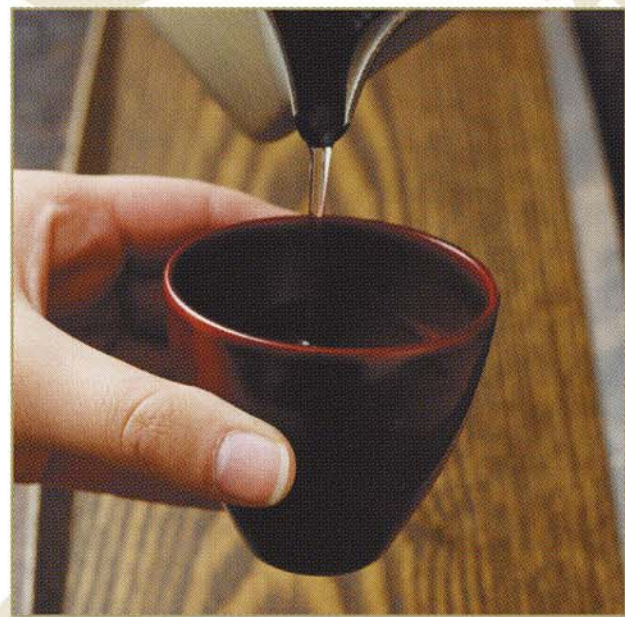
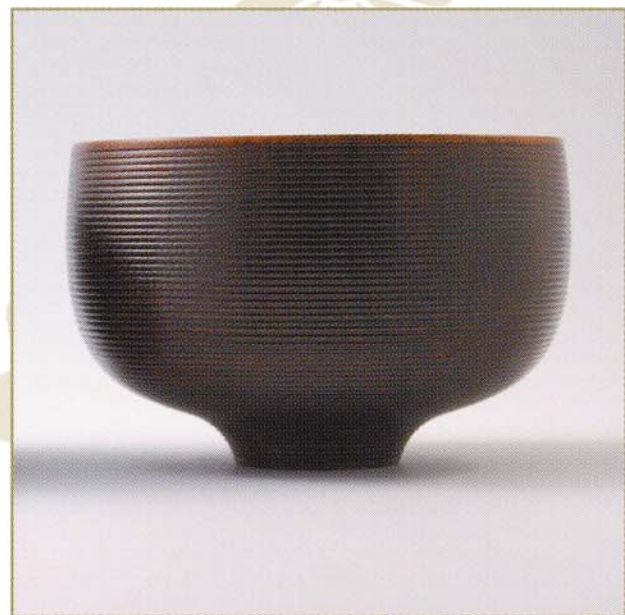


平成23年度クール・ジャパン戦略推進事業 参加企業



■ 輪島キリモト・桐本木工所
輪島キリモト・桐本木工所は漆の器から小物、家具、建築内装材に至るまで、漆が今の暮らしに溶け込むような可能性に挑戦し続けている。お酒やドレッシングを入れたり、料理を盛ったりする四方片口は杵を使用し、鋭利な小刀や小カンナを駆使して流れるような曲線を作り出している。その後、黒漆を使って丁寧な拭き漆が施され、しっとりと深みのある仕上がりを見せている。口先の形状には細心の注意を払い、日本酒などの切れが良く使えるようにしている。



■ 株式会社酢谷
酢谷は喜八工房という店舗を構え、多くの人に山中漆器を触れてもらえるよう、さまざまな漆器を生産・販売している。「杵、糸筋碗」は曲線美あふれるモダンなフォルムでありながら、細い筋を取り入れ、落ち着いた艶消し拭き漆で仕上げることで、寂びの風情を演出したおわん。手に吸い付くような質感もあることから、「見る美、用いる美」を実現している。日常雑器として使い込むうちに味のある姿を楽しめ、愛着が湧いてくる製品である。



■ 有田製窯株式会社
有田製窯は永遠に輝く深みのあるプラチナと、日本の粉雪を思わせる白磁の美しさが特徴である有田焼の新ブランド「JAPAN SNOW」を立ち上げている。400年続く有田焼を今後の100年につなげるためには新しい様式が必要と判断し、現代の生活様式に合わせたモンブランに仕上がっている。「おもいやり」の心をモノを通じて伝えることにより、本物を求める世界中の人々に満たされた上質の生活を届けられることができると考えている。



■ 株式会社簞木
九谷焼簞木商舗は1822年に九谷焼最初の商家として金沢で創業した。同社オリジナルの九谷焼ワイングラスはステム部分が九谷焼、グラス部分がドイツ・シュペイラウ製のグラスでできている。伝統柄から現代柄まで数十種類あるステムデザインと、五つのグラスタイプを自由に組み合わせられ、機能性と美術性を兼ね備えたワイングラスとして国内外で好評を得ている。同社は今後も「九谷焼の価値を世界に広める」という創業の精神に徹し、日々挑戦していく考えだ。

NIIGATA
蒸金属洋食器
・株式会社セブン・セブン

ISHIKAWA
九谷焼
・株式会社簞木
漆器
・輪島キリモト・桐本木工所
・株式会社酢谷

SAGA
有田焼
・有田製窯株式会社
・村上美術株式会社



■ 村上美術株式会社
村上美術は「日常生活の中に古き良き日本の伝統であるアートを取り入れる」をコンセプトにして、さまざまなモノづくりを提案している。こうした中、有田焼とのコラボレーションも展開している。有田焼には当時流行とされていた形や模様が凝縮され、製作に携わった職人たちの思いを垣間見ることができるとに着目。先人が作った有田焼に少し手を加えることで、現代の人々の感覚に受け入れられ、次の世代へ新たな伝統が引き継がれていくと考えている。

■ 展示会の開催
3月15日(木)／ル・パヴィオン・エリゼ・ルノートル(パリ)
「日本のエレガントで洗練された器たちとフランス料理との出会い」をテーマに、百貨店、インテリアショップ、セレクトショップなどのバイヤーに向けた展示会を開催



■ 株式会社セブン・セブン
セブン・セブンのブランド「SUSgallery (サス・ギャラリー)」はチタン素材の良さと、長年引き継がれる技術力を生かした製品作りを展開している。生活の中で当然として存在する「必需品としての金属」と、ずっと同じ品質のまま生まれ変わることができる「素材としての金属」に「愛着としての金属」という新しい価値観を追加することで、これまでにないチタンカップを完成。高い保冷・保温力を実現し、優しい肌触り、優しい口触りとなっている。



■ 株式会社二葉
二葉は先人たちが培った江戸染色の技術を継承してきた二葉苑を運営している。二葉苑では機械化され、大量生産が進む染色の世界で、職人の手による技術にこだわり、繊細な美しい文様が広がる「東京染小紋(江戸小紋)」を心を込めて作り続けている。2003年には在英大使館で開いた「江戸更紗・小紋展」を皮切りに、活動の幅を日本のみならず世界へと広げている。現在は主にフランスで江戸更紗・小紋の技術を生かしたスカーフが人気だ。



■ 有限会社大西陶芸
大西陶芸は伝統的な美術品・花瓶からアートフルな日用食器まで幅広く低部焼を製作している。「夢青磁ぐいのみ」は独自の技術で作り上げた艶消し青磁。透き通るガラスのように凛としながらも、柔らかな風合いを感じさせる青磁の美しさから「夢青磁」と名付けた。低部焼で培われた白い磁土を優しく丁寧に一点ずつクロクロで成形。成形されたぐいのみは全て異なり、それぞれの表情を見せるため、静かに主張する個々の表情を感じ取りながら青磁の色合いを選択して完成する。

■ 見本市への出展
3月25日(日)／新国際展覧センター(成都)
中国国内で行われる酒類等の見本市である「2012 成都春季全国糖酒会」に出展し、商談会を行う

伝統



質が高い日本の伝統産業
現代の感性加え新たな価値観創出

日本の伝統産業品はオリエンタル志向の高まりや質の高さにおいて世界で注目されている。中でも日本酒は中小蔵元が市場へ進出することによって海外でも高い評価を得ており、食器やインテリアについても贈答品としてのニーズが高まりつつある。経済産業省は海外市場におけるブランド化や流通システムの構築を目的に、平成23年度クール・ジャパン戦略推進事業を実施。3月6日に中国・上海、15日にフランス・パリ、25日に中国・成都で国内9社による伝統産業品の展示や、現地のバイヤーに向けたプレゼンテーションを行い、日本の伝統文化の普及を進める予定だ。ここでは日本の伝統文化と展示会に参加する国内9社の出展概要について紹介する。

陶器・磁器

日本人は器の手触り、ぬくもりを楽しむ文化を持っている。そのため、日本の伝統的な食器には「とって」が付いてないものも多く、飲み物以外に茶碗や味噌汁碗なども、器を手にとって直接口を付けて使用する。日本の焼き物は大きく分けて、陶器と磁器の2種類ある。陶器の原材料は粘土で、素地は荒く、焼成温度は磁器よりも低く約1000から1200度C程度で焼くため、割れやすい。そこで土の温かい風合いを大切にして、絵付けをせず、釉薬の自然な流れを景色として楽しむ器が多く見られる。一方、石の粉を材料とする磁器は大陸の技術を取り入れ、江戸時代から日本でも本格的な生産が始まった。焼成温度は1300度C前後と陶器に比べて高く、地肌が白く表面が滑らかなため、鮮やかで細かい絵付けが可能。その特徴を生かして、中国風の赤絵や日本独自の色鮮やかな絵付け技法が発達し、江戸時代後期には欧州にも輸出された。



漆器

漆器とは、漆の木からにじみ出る強い接着力と艶やかな光沢をもって出る漆(樹液)を塗った日本の伝統的な器である。一本の漆の木から、夏の間に採取される漆の量はわずか200グラム程度で、おわんをようやく10個作れる量と言われている。漆器は「ジャパン」と呼ばれるほど日本の代表的な器だが、平安時代後期までは貴族だけが使用できるものだった。しかし平安王朝が崩れ、量産技術が開発されると、庶民にも広く使われるようになり、中世には日本人の日常生活に欠かせない道具となっていた。

